

## 全国大学史資料協議会

### 設立記念総会・一九九六年度全国研究会

一九九六年四月一日、全国の学校史、史(資)料室の実務担当者による組織、全国大学史資料協議会が発足した。この組織の前身である東日本大学史連絡協議会と西日本大学史担当者会とは、一九九二年から年に一度、合同で研究部会を持つて互に交流を深めてきたが、一昨年来、両会合同の気運が高まり、それぞれの例会、合同の役員会を開いて話し合いを進めてきた。そして東日本では四月に、西日本では五月にそれぞれ総会を開いて両会の合同を決議し、四月一日に遡って全国大学史資料協議会が正式に設立された。

設立記念総会となった一九九六年度全国研究部会は、広島大学教育研究センターの皆様のご協力により、一九九六年十月七日から九日までの三日間、広島において開催された。初日、二日目はあいにくの空模様であったが、参加校はオブザーバー校一校を含めて四六校を数え、出席者も七八名にのぼった。

初日は総会に先立って役員会が開かれ、新役員校を選出し、総会の手順について打ち合わせをした。

会場となった広島大学附属中央図書館ライブラリーセンターには受付時間前から参加者が集まり、定刻午後三時、全国大学史資料協議会設立記念総会の開会が司会の中央大学の松崎 彰氏によつて宣言された。総会ではまず桃山学院の西口 忠氏による協議会設立の経緯と役員会での審議結果の報告があり、協議会の四月一日附正式発足を確認し、新役員校を承認した。会長校には神奈川大学、副会長校には桃山学院が選ばれた。続いて新会長校・神奈川大学の澤木武美氏より、史料の持つ意味が問い直されている昨今、大学史の役割はこれから一段と大きくなってゆくであろう、この時にあってこの協議会が誕生したことは誠に意義深いことである、との挨拶があった。次に一九九六年度の活動計画が東日本部会、西日本部会の各事務局校、中央大学の松崎氏、関西大学の熊 博毅氏より発表され、総会は閉会した。

十分間の休憩をはさんで、記念講演に移った。国立学校財務センター研究部の天野郁夫教授に「日本の高等教育と私学」と題してご講演いただいた。先生はご専門の社会教育学の観点から近代化と産業化の関連をとらえ、日本の高等教育史における私立と公立の

違いを中心に話された。日本の高等教育の特徴は官学と私学の並存にある、と先生は言われる。今まで大学史を研究する場合、官立大学が中心であったが、高等教育を語る場合、専門学校つまり私学における教育を忘れるわけにはいかない。そして二つの教育の違いは二つのモデルの違いによる。官立を教育と研究の統合、官僚養成を目指すドイツ・モデル、私立を市民のための人間形成教育、教養教育を目指すアメリカ・モデルと定義する。ドイツ型は教育よりも研究に重点を置いた専門家教育が主体であり、アメリカ型は実学教育の上にドイツ型の大学院を置くという複合組織を持つリベラル・アーツの教育といえる。高等教育のあり方については、二つのモデルの間で葛藤もおきたが、戦前まではドイツ型で行くことになる。戦後、大学と専門学校の統合、一元化がはかられ、大学は一般教育を行ない、大学院で研究を行なうというアメリカ型へと移行したが、それは組織だけがアメリカ的になったにすぎず、意識はついていないのが実情である。また最近では、学校教育の見直しが盛んに行なわれるようになり、国公立が私立に近づいてきたともいえる。今後大学史には学校の自己点検作業の一環となる要素がなければならないとの提言で話を締めくくられた。

質疑応答のあと、広島大学大学教育研究センターの羽田貴史助教授のご案内で、同センター内を見学した。一九七二年に発足したセンターは一九九五年に現在の西条キャンパスに移転、事務室や収蔵庫には余裕があった。センターでは各大学の便覧や規則を収集しており、こうした史料を集めている大学はほかにはない、とのこと。

見学後、広島大学学生会館食堂に場を移して、研修懇親会が持たれた。懇親会は、普段の例会や研修ではなかなかお話しする機会のない方々にお目にかかり、直接有益な話や情報交換をする貴重な場となっている。閉会後も話がはずんで、散会したのは予定時間を大幅に越えてからであった。

二日目も前日と同じ会場で、午前は講演、午後はパネルディスカッション。まず羽田助教授が「大学史研究の現状と個別大学史の課題」と題して、ご自身の研究を中心に話された。先生はご専門の大学財政史の立場から大学史を研究してこられたが、今まで大学史はアカデミックな研究の対象とはなり得なかった。それは大学史が今まで事件史としての発想から作られていたことによる限界や大学誕生のメカニズムの研究の難しさなどの理由によるが、近年では手に入る史料がふえ、大学史を研究することが現在の大学のあり方や教育史研究に役立つということがわかってきた。今後は大学改革をも念頭において、実学指向の帝国大学史観ではなく、教養型の大学モデルの研究を取り入れ、単に個別大学の歴史ではなく、連合体としての「大学」の歴史を研究していきたい、と述べられた。

「大学史編纂から展示室設置まで」を統一テーマとした午後からのパネルディスカッションでは三つの報告があった。はじめは大阪商業大学の新井芳則氏による「大阪商業大学(谷岡学園)の年史編纂と展示室及び今後への私案」であった。学園の歴史、組織から

二日目の会合のあとの一コマ(写真提供・西口氏)

最後列一熊(関西大学)、中列左より一澤木(神奈川大学)、鈴木(明治大学)、益井(國學院大学)、西口(桃山学院大学)、寺西(神戸女学院大学)、前列左より一奥田(元大阪教育大学)、竹市(東海大学)、若山(神戸女学院大学)、佐藤(国士館大学)の諸氏

であるためスタッフは事務職との並任であるのに対して、名古屋大学では史料室が調査・研究組織と位置付けられているのでスタッフは教職である、とのこと。このほか、さまざまな資料の保存についての各校の状況も報告された。

質疑応答のあと、桃山学院の西口氏より海外の大学アーカイヴズ訪問の報告があり、シドニー大学とサンパウロ大学のアーカイヴズが簡単に紹介された。このうち、副会長校・桃山学院の原 登久雄氏より閉会の辞があり、三日目は自由参加となっていたので、これをもって今年度の全国研究部会は一応閉会となった。

三日目は広島女学院歴史資料館の見学である。当日は広島女学院大学の文学館二階の会議室に集合し、そこで広島女学院歴史資料館館長である広島女学院大学の岩内 一郎教授から歴史資料館の説明を受け、岩内先生のご案内により二班に分かれて資料館を見学した。広島女学院大学のキャンパスは山の手にあり、歴史資料館は文学館の正面、キャンパスのほぼ中心に位置していた。一階に事務

話をはじめ、「五十年史」の構成と編集方針、「七十年史」に向けての私案、現在の学園資料室の概要と今後の資料室づくりに向けての私案を配布資料に沿って話された。次に東海大学資料室の日露野好章氏の報告「東海大学における学内類似機関と資料室」があった。東海大学には資料室のほかに展示室を持った機関が三つあって、類似の活動を行なっているが、資料の重複があるなど明確な役割分担がない。今後は機能的役割の明確化が必要である、と話をしめくられた。最後に東京大学史料室の中野 実氏が「東京大学百年史編纂後の史料室」と題して報告された。百年史編纂室と史料室との組織上の比較と史料室の概要を述べたあと、今後の課題として史料室の制度化と整備の問題をあげられた。史(資)料室の組織上の位置については各校とも事情が異なっているが、独立部局か附属施設かという問題はいずれの学校にも共通のものである。東京大学では独立組織を目指してゆきたい、と話を結ばれた。

質疑応答では、昨年、年史編纂を終え、史料室を発足させた名古屋大

室と展示用ロビー、二階に常設展示室と収蔵庫をもつ二階建ての瀟洒な館である。創立百周年を記念して学院の精神的シンボルとなるようなものを、ということで作られたとのこと。新聞、公文書類等の学外史料のほか、ミッシェン系の史料を中心に収集している。一階のロビーは主に学生たちに見せることを目的とした企画展示用のスペースで、ビデオ上映をしたり、写真展を開いているとのこと。訪問した時には「校舎にみる広島女学院の教育」という写真展が開かれていた。二階の常設展示室には学校関係者の資料が展示されていた。収蔵庫は木造、空調設備も整っていて貴重な史料を保存するのに充分の配慮がうかがわれた。棚に並んでいた史料用の保管箱は施設課の方の手作りによる特注の木箱であった。資料館には専任のスタッフがいて、通常週三日、自由に館内の見学ができる。事前に連絡を入れれば閉館日にも見学ができる。また、今回の見学会のような大人数の場合には、館長の先生が自らご案内下さる、とのこと。史(資)料室が独立の建物と専任のスタッフを持ち、資料収集、保存、展示を行なうことは協議会参加者の誰もが願っていることである。この資料館にはその全てが揃っていた。

大学史編纂のための情報交換の場として始まったこの協議会も、回を重ねるにつれ、大学史を作るための実務だけでなく、史料に対する考え方や扱い方、史(資)料室のあり方についても考えるようになり、単なる実務担当者から専門家としてのアーキヴィストを指向するようになってきた。来年度は外国のアーキヴィストを招いて専門家のお話を伺おうという企画も提案されている。全国組織として生まれ変わった協議会が将来、専門家養成機関としての機能を持つようになるかもしれない。組織が全国規模に拡大したように、史(資)料室の活動も今後一層の発展が期待される。

今回の全国研究部会のためにご協力下さった広島大学大学教育研究センター、広島女学院歴史資料館の皆様、そしてこの会の企画、運営のためにご尽力下さった役員校の皆様に、いつにもまして充実した三日間となったことを感謝して、改めて御礼申し上げます。

(寺西裕加恵)